

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第408号 平成24年10月5日

ごんぎつね(2)

「ごんぎつね」という物語は、主人公の「ごん」が、人知れず尽くしていた相手から鉄砲で打たれて殺されるという悲劇的な場面で終わるのですが、しかし南吉は、悲劇だけを描いているわけではありません。悲劇の中にある救いと悔悟、悲しみと愛、その深く切ない関わりを描いているように感じます。

「ごん」は、悪戯者として描かれていますが、かれは早くに親を亡くした孤独なきつねです。「ごん」が悪戯するのは、寂しさの故ではないか、孤独から逃れるために、人間たちと関わりを求めていたのではないかと感じられます。

「ごん」は、兵十の母親が食べたがっていたうなぎを捨ててしまった事を、心から悔います。

「兵十のおっかあは、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら、死んだんだろう。あんな悪戯をしなければよかった」

そして、「ごん」は、赤い井戸のところで麦をといでいる兵十を見て「おれと同じ独りぼっちの兵十か」と思います。

「ごん」は、兵十の心の痛み、兵十の母親の悲しみに共感し、共感することによって「ごん」自身が変わっていきます。

はじめはうなぎを捨てたお詫びのつもりでした。でも、毎日栗や松茸を届けているうちに、愛が変わっていったのではないかと思います。勿論それは、相手には届かない愛、無償の愛とでもいうべきかもしれません。

だから、「ごん」は、自分の気持ちが相手に伝わっていないことを知りながらも、栗を届けるのを止めようとはしなかったのだと思います。

「ごん」の本当の気持ちが兵十に伝わる為には、自分の命を代償にしなければなりません。 「ごん」が火縄銃で撃たれて死ぬ間際に、「ごん」と兵十の心は通じ合います。

「ごん」にとっては余りにも大きな代償であり、不条理ではないかを感じるかも知れませんが、しかしそれは、「ごん」が救われた一瞬でもあるのです。

最後にこのような場面を用意したのは、作家としての南吉の優しさともいえるでしょう。何故なら、現実の世界は、互いに心が通じぬまま別れ別れになってしまう事が少なくないからです。もしかしたら、母親と死に別れ、孤独に生きてきた「ご

ん」と自分とを重ね合わせていたのかも知れません。

毎日、栗や松茸を運んでくれていたのが「ごん」の仕業と分かった時、兵十は「ごん」の全てを許したに違いありません。しかし、同時にそれは、兵十にとって大きな悔恨となります。知らなかった事とはいえ、自分に密かな喜びを与えてくれた「ごん」を撃ち殺してしまったのですから。

このように、悲しみや悔悟、苦しみや救いは連環し、大きな輪となっていきます。人はそうした輪の中に生きているのだという事を、「ごんぎつね」は読者に語っているのだと思います。

病床に伏せる南吉は、亡くなる2日前、見舞いに来た小学校時代の恩師に「私は池に向かって小石を投げた。水の波紋が大きく広がるのを見てから死にたかったのに、それを見届けずに死ぬのはとても残念だ」と語ったといひます（新美南吉記念館編集「生誕百年新美南吉」から）。

南吉は「ごんぎつね」が教科書に掲載されている事など知る由もないでしょうが、彼の残した数々の作品は、人々の心に大きな波紋となって広がっている事は確かだと思います。

（塾頭：吉田 洋一）